

Watch!

統計から社会の実情を読み取る

第3回 生まれ変わるとすれば男?女?

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■ 東京大学農学部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌「国民経済」、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)等。



世界を驚かす日本女子スポーツの競技力

サッカーの女子ワールドカップドイツ大会での日本女子「なでしこジャパン」の優勝は、決勝戦の強豪米国に対してリードされながらも2回にわたり同点に追いつき、最後はPK戦で勝利を手にした沈着冷静かつ果敢な戦いぶりで日本と世界の人々を驚かせた。

まぐれで世界一にはなれない。開催国ドイツを破っての日本の準決勝進出に「奇跡」と喜ぶ小

倉日本サッカー協会会長に対して、国際サッカー連盟(FIFA) ブラッター会長は「近年の日本女子の発展と世界大会でのプレーを顧みれば、象徴的な出来事と受け止めていい」と反論したという(読売)。サッカーばかりではない。すでに、日本の競技スポーツにおいては、女子が男子を凌駕している。アテネ、北京という過去2回のオリンピック大会金メダル獲得数は、女子が男子を上回っており、女子0~2個というそれ以前の時代とは異次元の実績を挙げているのである(図1)。

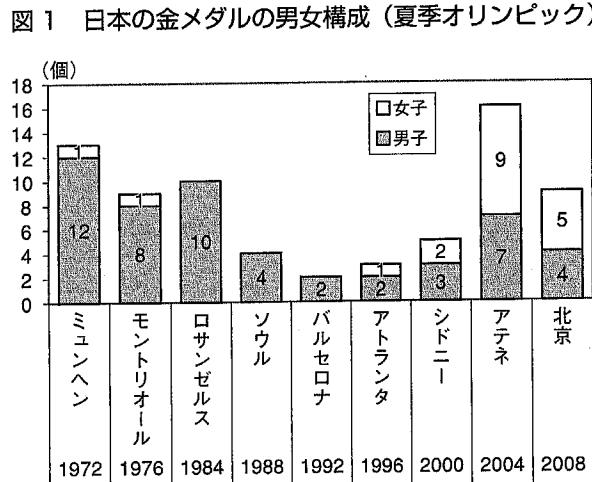
今回は、スポーツにおける女子の躍進の社会的背景として、日本女子が日本男子の想定を越えた領域へと突き進んでいることを示すデータをいくつか掲げることとする。

生まれ変わるとすれば男?女?

長期的な日本人の意識変化を見ることができる継続的な意識調査としては、以下の三つが貴重である。

①「世論調査」(内閣府)

— 戦後すぐから毎年(継続設問は一部)



注) 団体競技金メダルは一つにカウント

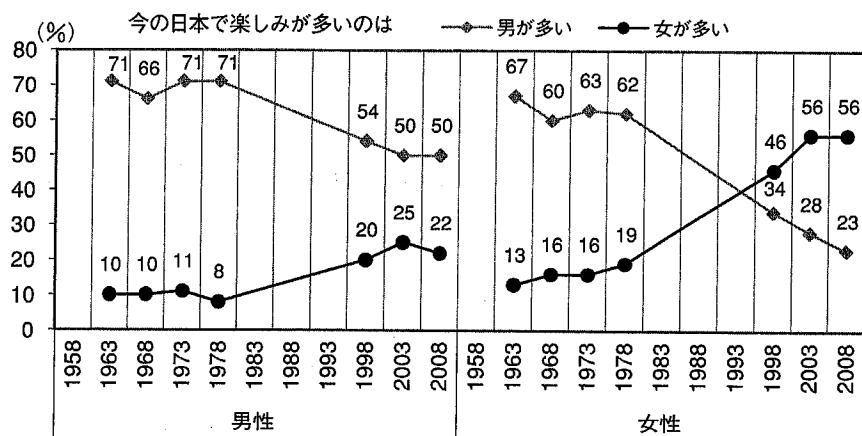
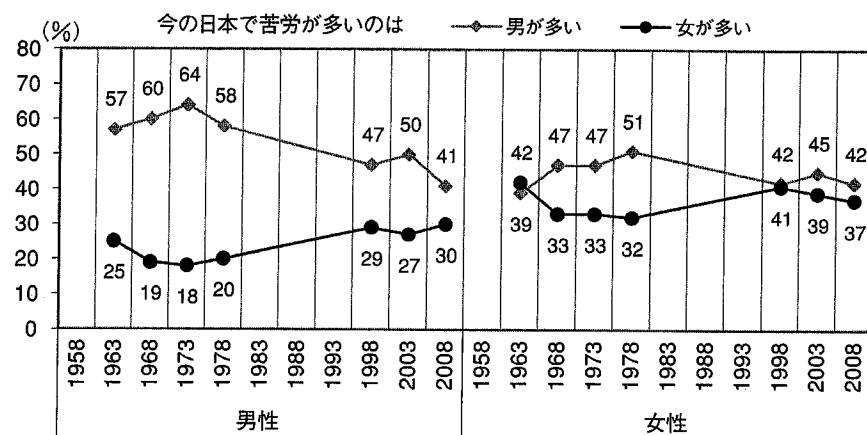
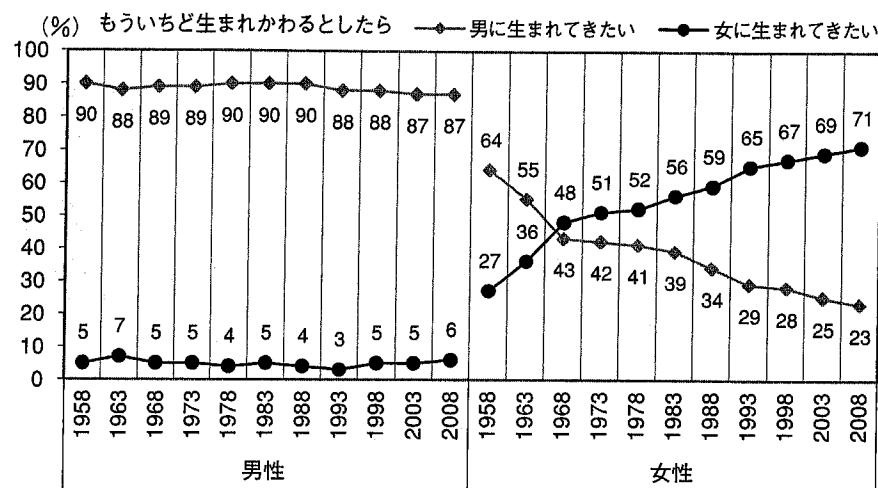
資料) JOCなど

- ②「日本人の国民性調査」(統計数理研究所)
— 1953 年以来 5 年ごと
③「日本人の意識」調査(NHK 放送文化研究所)
— 1973 年以来 5 年ごと
- ここでは、②の調査が 1958 年以来聞いていている

「生まれ変わるとしたら男がいいか女がいいか」という問い合わせへの回答結果の長期推移を追った(図2上)。

回答結果は男女で著しく異なっている。すなわち、男性は無変化、女性は大変化である。男性は

図2 生まれ変わるとしたら男がいいか女がいいか



注) 回答には表記の他「その他」「分からない」があるので足して 100 にならない。

資料) 統計数理研究所
「日本人の国民性調査」

一貫して同じ男に生まれてきたいとする者が9割程度を占めているのに対して、女性は、かつては男に生まれたいとする者が6割以上の多数派であったのが、この50年の間に女に生まれたいとする者が7割以上の多数派を占めるように変化したのである。女性の意識変化は、まことに大きいといえよう。

こうした結果となった要因を探るため、関連した二つの問い合わせ、すなわち、男女のいずれが苦労が多いか、また、男女のいずれが楽しみが多いのか回答結果の推移を見てみることにしよう（図2中・下）。

「苦労」の面では、男性の回答も女性の回答も、おおむね男の方が女より苦労が多いとしている。男性の回答の方が男の苦労をより大きめに評価しているが、時系列でみると、男性も女性も男女の苦労の差については余り変化がない。男性の方の回答で、男の苦労が多いという回答がやや減り、女の苦労が多いという回答が増えてきている傾向はある。

男性は、女性も働く機会が増えたので苦労が多いのでは、と思っているが、女性の方は、別に大したことないと思っているようでもある。男女とも、男は職場の人間関係に巻き込まれて苦労が多いよね、と考えているようである。

戦後の大きな意識変化が見られるのは、「楽しみ」の男女差についての見方である。男性の場合、男の方が楽しみが多いとしているが、その割合は下がってきていている。むしろ女の楽しみの方が多いのではと思う男性が増えている。女性の場合は、大変化であり、昔は男の方が楽しみが多く、女は楽しみが少ないとと思っていたのに、最近は、女の方が楽しみが多く、男は楽しみが少ないと評価しているのである。

すなわち、結論的にまとめると、女性が、もう一度生まれるなら女に生まれてきたいと考えるに

至ったのは、苦労の面の変化ではなく、楽しい人生を送るのは女だと思うようになったからである。生き生きとしていて、快活に笑っている美しい女性が多くなったと感じるにつれ、なるほどと思わせる意識調査結果である。また、この結果は、フェミニストが、女性の目線ではなく、男性の目線で女性の生活や人生を評価しているのではなかろうかと感じさせるデータでもある。何か勘違いをしているのは女性の方なのか、男性の方なのか、よく考えてみる必要があろう。私は女性の方が勘違いしているとは、どうしても思えない。

楽しい時間を過ごしているのは誰か

本当に女性の方が「楽しみ」が多いのだろうか。これを裏付けるデータを次に掲げる。

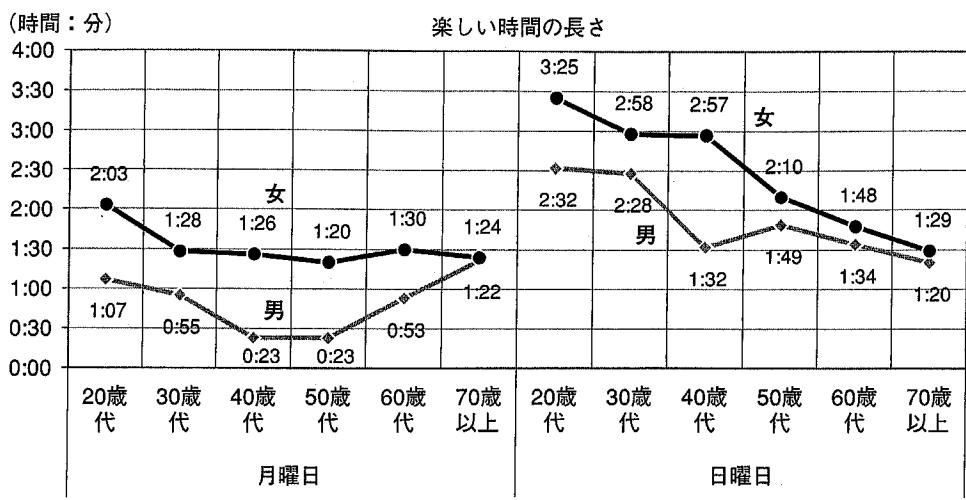
NHKと総務省統計局は、国民の生活時間調べる調査を行っているが、いずれも生活行動の時間を調べるだけで、その時の気分を調べてはいなかった。この点を補うため、NHK放送文化研究所が2008年に行った「テレビと気分」調査では、テレビ視聴だけでなく、食事や仕事やレジャーなどすべての生活行動にわたって、その時、楽しかったのか、忙しかったのか、退屈していたのかなどを6区分で、その時の気分を聞いている。

図3では、この調査の結果から、男女年齢別に「楽しかった」時間の合計をグラフにした。これを見ると以下の三つの点が明解である。

- ①若い世代の方が楽しい時間が長い
- ②女の方が男より楽しく生活している
- ③20歳代の男は女ほど楽しくしていない

第一に、若い世代の方が楽しい時間が長いという点については、日曜日の結果に端的にあらわれている。男女ともに、年齢が加わるのに比例して楽しい時間は減る傾向にある。ただし、40歳代

図3 楽しい時間すごしているのは誰か



注) 1日を15分割みにし、生活行動とともに六つの気分の何れであったかを聞いた結果より。六つの気分とは、①忙しい時間、②リラックスした時間、③楽しい時間、④ドキドキした時間、⑤集中した時間、⑥退屈な時間。NHK放送文化研究所が関東(1都6県)の20歳以上の男女1,800人に対して2008年10月19日(日)・20日(月)に行った「テレビと気分」調査による(有効回答率59.2%)。

資料) NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2009年4月号

では、女はそれほど減らず、40歳代なりの楽しみが多い(多分、子どもとのかかわりや子どもを媒介とした付き合いなどによるものか)という結果に対して、男は大きく楽しい時間が減ってしまい、50歳代より楽しい時間が少なくなっている。

平日である月曜日については、こうした年齢に伴う低減傾向は明確ではなくなる。女は、20歳代では平日でも楽しい時間が2時間以上多いが、30歳以上でも1時間半程度は楽しい時間を維持している。男は、若い時期は1時間ほど楽しい時間があるが、40~50歳代では20分と一日の中で楽しい時間はほんの少しとなる。むしろ、定年後の者が多い60歳以上で楽しい時間が復活する。70歳以上になると20歳代より楽しい時間が多い。

第二に、女の方が男より楽しく生活していることは確かである。平日、日曜ともに、すべての年齢で女の過ごす楽しい時間が男の過ごす楽しい時間より多い。

平日では20~50歳代、日曜では20~40歳代で男女の格差が大きい。特に、40歳代の男は一週間を通して、絶対量でも、女との対比でも、樂

しい時間は少なく、ほとんど悲惨ともいうべき毎日を送っているといって良いであろう。

第三に、若い世代の象徴である20歳代の男女を比較すると、女性は他の世代に比べて楽しく過ごしている時間が非常に長いが、男性の方は、女性ほど他世代との差が顕著でない。ここに「草食男子」と「肉食女子」という現象の反映を見ることが可能である。昭和20年代生まれの私が生徒・学生の頃、廊下で大きな声で騒いでいたのはもっぱら男子であり、女子は静かにしていたことを思い出す。最近の学校では、女子の笑い声の方が目立つようである。

若い男女の方が年寄りより楽しく暮らしているのは、社会として正常なことであろう。そういう社会をつくるのが大人の役割である。平日の男20歳代の楽しい時間が男70歳以上より少ないのがむしろ問題である。

女性が笑顔でいれば男性も幸せになれるので女性が男性より楽しい時間を送っているのは悪くない。逆であれば男性として情けないという感じになるであろう。ただし、男20歳代~50歳代の

楽しい時間を、もう少し女性レベルに近づけた方が、世の中全体が明るくなると思われる。男女共同参画は引き続き推進すべき課題であるが、それ以上に、男子脱草食化計画や中年男性再活性化計画にも力を入れるべきである。

日本女子の強靭な精神力

日本の男女が正反対の方向に向かっていることを示すデータに、体格の推移がある（図4）。

肥満か痩せかを示すBMIデータを、20歳代男女について戦後から示したこの図を見れば、女子より痩せていた男子が肥満化の方向に向かい、男子より肥えていた女子がスリム化の方向に向かつて推移したため、1970年代には体格が逆転し、格差はさらに広がってきていることが明快である。

物があふれる社会の中では、自らを律しようとしなければ太ってしまうため、米国の例を引くまでもなく、先進国における肥満化傾向は、世界的な健康問題としてクローズアップされている。

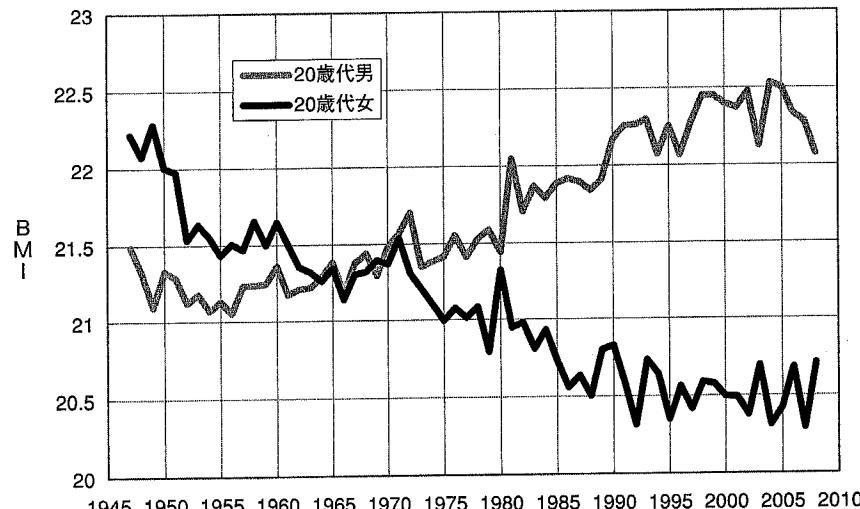
日本女子の痩せの傾向は、先進国の中では珍しく、むしろ、痩せ過ぎ女性や低体重出生児などの

健康問題を引き起こしている。しかし、日本女性が豊かな社会の中でスリム化しているということは、栄養や運動に気をつけながら体格のコントロールを持続的に行っているということでもあり、強靭な精神力がなければ無理である。同じ環境下で生きている同一の動物種であるにもかかわらず、体格の向かう方向が男女で全く逆であるというのは、やはり驚異的なことである。

いまでは、海外に活躍の場を求める女性が男性以上に多くなっている。外務省「海外在留邦人数調査統計」によれば、海外在留邦人は、1999年以降、男性より女性が上回るようになり、差は広がっている（2009年10月1日現在、男54万人、女59万人）。JICAによれば、本年6月末にアフリカに派遣されている海外青年協力隊員は1,057人であるが、そのうち、女性が558人と過半数を占める。

スリム化して体の切れもよく、おしゃれをしてきれいになり、笑顔で楽しく暮らしながら、男子の不甲斐なさを笑うかのように世界一の座を冷静沈着に射止める日本女子は、鬱屈して太り、大した成果も挙げられない日本男子とは、恐らく別の生き物なのであろう。

図4 太っていく男子、痩せていく女子～20歳代男女の体格変化～



注) BMIは体格指数で体重を身長の2乗で割ったもの。25以上は「肥満」、18.5以下は「やせ」とされる。

資料) 厚生労働省「国民健康・栄養調査」

*参考文献

- [1] 読売新聞「なでしこ快進撃「まぐれでない」…FIFA会長」(Yomiuri Online 2011年7月17日19時50分配信)。

*「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録1175「海外在留邦人数の推移」
- [2] 図録2200「日本人の体格(BMI)の変化」
- [3] 図録2470「楽しい時間をすごしているのは誰か」
- [4] 図録2475「生まれ変わるとしたら男がいいか女がいいか」
- [5] 図録2710「女性比率の推移」